

伊藤整における改稿の諸相

飯島 洋

はじめに（おことわり）

去る九月二二日、伊藤整の著作権継承者でいらっしやった伊藤礼氏が亡くなられました。氏は一次資料を用いた文学研究の意義に深いご理解をお示し下っていました。改めて深く感謝申し上げますとともに、謹んで哀悼の意を表します。なおこのため、当面著作権の処理が中断されます。そのため本稿におきましても、自筆資料を直接引用する必要のある内容は扱わず、伊藤整旧蔵の書入れ本（訂正本）に基づいて改訂の上再刊されたテキストの異同を考察することといたします。訂正が試みられながらも改訂には反映されなかった、またさらに改変が加えられたテキスト、読者からの手紙への改訂による応答などのテーマについて、次号以降で取り上げる予定です。

一、問題の所在

伊藤整は雑誌社への提出原稿の段階でも徹底的な加筆修正を繰り返して、初出誌のテキストを単行本に収載する際にも綿密な改訂を施していた。さらに、いったん単行本となったものについても、元版に書入れをおこない、これを訂正本の原本として増刷や改版、作品集・全集に収載する機に反映させた。瀬沼茂樹は河出文庫版『霧氷』解説（河出書房、一九五四・八）で「どちらかといえば作者はたえず作品に彫琢を加える方」と伊藤を評し、『霧氷』は「紙型からすぐに単行本となったために、書き上げられたまま、十分な訂正を加えることもできなかった」ゆえに作品集にも文庫にも収録されずにきたと捉えている。前回の会報では『若い詩人の肖像』を取り上げて、初出誌原稿からみえる作者の描かれる自己を相対化しようとする姿勢が再刊される際にも持続していることを確認した。本稿においても単行本化されたものが改訂版においていかなる変容を遂げたかを追うことにしよう。

二、配慮・挑戦・挑発

『得能五郎の生活と意見』（以下『得能』）は一九四一年に河出書房から刊行された。戦時体制に向かう時代に風刺的な姿勢で向き合った知識人を描いた本作は、時局に対する消極的な抵抗か、あるいは同調かが議論の的となってきた。近年では尾形大がその風刺について「時局への批判意識」ではなく「文学者・得能五郎の自

意識に、何より彼が拒絶する伝統的な日本的私小説の枠組みに」向けられていたとの読みを示している^一。

『得能』は一九四八年三月、講談社から改訂を施して再刊された。両者の異同について、亀井秀雄は「占領軍の検閲と民主主義のイデオロギーの圧力」の強力さを見てとり、その後の再刊でも初刊の表現に戻すことをしなかったことについても伊藤の戦略を想定している^二。

細川書店から一九五一年一〇月に刊行された『得能』は講談社版後の最初の再刊本だが、ここにおける改訂は講談社版の初刊本に書き入れをおこなった本に基づいている。検閲やイデオロギーとの相剋といった大きな問題系に関わる改訂は基本的に講談社版でなされているが、細川版での改訂にも、文壇や社会に對する意識の投影を読み取ることができる。

「マルブウルの歌」の章で銀座について説明する語り手は、銀座が浅草や新宿といった「場末的」な繁華街とは異なり^三、「格式のやうなものを持たされてゐる」と述べ、この街に対する作家たちの発言や姿勢を紹介する。

新しい精神の一面を代表すると言はれる現存の小説家と謝見隆一は、銀座を歩く人間どもは、明日は自分にどういふ非運がやつて来ようとも今日は好運の頂上にゐる、といふやうな顔をしてゐる、といふ意味のことを書いたことがある。(七四頁)

この与謝見なる架空の作家は、訂正本を反映して次のように改められた。

新しい文学精神の一面を代表すると言はれる横光利一は（七七頁）

一九四七年一二月に横光利一は死去しているので、配慮の必要がなくなったということであろうか。ところで一九二八年に没している葛西善蔵については、講談社版に次の記述がある。

昭和の初め頃死んだ小説家葛西善蔵は、自分は銀座を歩けない、とか、銀座へ行けないとか言った。（七四頁）

これは

性来の社交嫌ひにて、東京に居住せる場合も、銀座などの華かなる文化街へ出ると圧迫を感ずるといつて自発的に出かけたことがなく

『葛西善蔵選集』第二卷（改造社、一九四八・一）所収「年譜」

といった現実の葛西像に基づいている。『得能』では続けてその理由を銀座の歩行者たちが「舞台の上にある」ようにしていることが我慢ならないと推し量っている。つまり語り手のいう「格式」とは、日常の素の自分とは異なった装い、演技が要求される場ということを意味すると思われる。

さて、銀座を歩く人間の表情を巡る横光の発言といえ、『書方草紙』（白水社、一九三一・一一）に収められた「銀座について」の次の一節が挙げられる。

私はこれまで銀座と云ふものが、実は恐かった。われわれ民族の文化の先端は、何はともあれ、あの銀座通りに最も鋭く現れてゐるのにちがひないのだ。（略）あそこを歩いてゐる人人のうち、殊によく二度も三度も出逢ふ人々で、幸福さうな眼の輝きをしてゐるものは殆どない。さう云ふ人々と出逢ふと眼と眼を合はせただけで、互にどちらも不愛想な表情の意味が直ぐ呑み込める。（略）文化の先端と云ふものは、いかに退屈で、喜びのない所から生れて来るかと云ふことを知つたのも、此の半年間の銀座通ひのお蔭である。

横光によれば、銀座には「文化の先端」が現れているが、そこは「退屈で、喜びのない」場所だという。

これは『得能』における、与謝見が書いたという銀座を歩く人々が「好運の頂上にゐる」ような表情をしているとの記述とは著しい齟齬をなす。そしてこの記述は、横光の本名が用いられた細川書店版でも変わっていない。本人が書いていないこと、実際に書いたこととは大きく方向性の異なる内容を書いたことになってしまっている。葛西の例だけをみると、昭和のはじめに亡くなった作家について実像に些少変更を加えても差し支えないと考えたということもできようが、むしろ死者についてはどのように脚色を加えても構わないと判断しているといえよう。

しかし、何のための脚色なのか。得能五郎は銀座を「ものものしい場所」と考えており、地方出身者としての銀座に対する距離感をこの章では吐露し、銀座を歩く際に求められる「表情」のあることを認識する。銀座に関する叙述は都市における人間の振る舞いを捉えた一種の文明批評となっている一節といえる。しかし、「銀座について」を読んだ読者は、現実の横光の銀座評との断層に気づく。作者伊藤整の勘違いと捉えるか、語り手の視点・知識と一致した得能の勘違いと理解するか、現実の横光とは別の、『得能』における虚構の横光像として受け容れるか。伊藤による改変は、読者の側の姿勢もが問われる挑戦的な方法を探っている。

次に、劇作家木下玄の遁走をめぐるドタバタを描いた新聞小説『花ひらく』（朝日新聞社、一九五三・一〇）に目を向けよう。これは一年後、『朝日文化手帖 花ひらく』（朝日新聞社、一九五四・九）として再刊された。初刊に施された訂正に基づいて本編にも細かな修正がなされているが、ここでは「あとがき」に注目し

たい。

伊藤は「強烈な事件」が読者に与えるのと同様の効果を言葉によってもたらす方法について考察する。そして次のような結論を導く。

むしろ、正直さや、間抜けさや、ウヌボレや、センチメンタリズム等は、ベッド・シーンや殺人などのやうな爆弾的な危険はないが、伝染病の細菌のやうな効果のあるものであり、危険物であり、また強力である筈のもので、人間存在の不安定性の別な現はれに外ならない。(二五四頁)

劇的な場面を作り出さずとも、「人間存在の不安定性」を示す表現を通して読者を「ナットクさせる」とは可能だとしている。内容自体はその後の改訂で変更されることはないが、「爆弾的な危険」以降に用いられるメタファーが修正されている。

爆弾的な危険はないが、細菌爆弾のような効果のあるものであり、危険物であり、また強力である筈のもので、人間存在の不安定性の別な現われと見るべきものである。(二一九頁)

「細菌爆弾」については、「科学の発達は果して人間を幸福にするかどうか」について、

原子爆弾や細菌爆弾のような強力な武器が発明せられるにいたつて、この問題は今や人々の議論の焦点となった感じがあります。

竹内均『現代科学物語 下』（旺文社、一九四九・三）

という指摘がされるなど、早くから関心が向けられていたが、『花ひらく』の改版に係る一九五三年から五四年にかけては、朝鮮戦争休戦の一方で、冷戦下での軍拡問題、軍事同盟による封じ込め政策があり、「第三次世界大戦」の危機をめぐる言説が飛び交っていた。

戦時中は京都学派の代表格として知られた高山岩男は、『二つの世界に抗して 文明の破局と人類の対決』（中央公論社、一九五四・二）で

もし「二つの世界」に分れた現下の情勢のまゝに第三次世界大戦が起き、原子爆弾、水素爆弾、細菌爆弾、毒ガスその他、科学技術の尖端を行く悪魔的武器を以て戦われるとするなら、ここに世界人類が恐らく復興や再建が不可能のまゝ、数世紀昔の暗黒時代に逆転するであろうことは疑えない。

と述べた。「細菌爆弾」は二極に分裂した世界で対立しあう人類に破局をもたらす要素の一つとみなされている。そしてこうした大量破壊兵器の拡散を阻止しようという動きも盛んになっていた。

第二日午後の全体会議^四では、各分科会の報告があつてから、ユ。ペンハーゲンの世界婦人大会への提案として、(一)朝鮮戦争の即時停戦、(二)大量殺戮兵器(原子爆弾、水素爆弾、ナパーム爆弾、細菌爆弾)の製造および使用禁止、(三)五大国平和協定締結、(四)世界の婦人の団結を決定しました。

清水幾多郎『真実について』(和光社、一九五三・一二)

「細菌爆弾」をめぐる現実世界の動向をみたとき、伊藤の用法はかなり不穏当にも思われる。ただ、伊藤がこの語を用いるのはこの時が初めてではない。

ちやうどその頃、世界第三次大戦を人類は原子爆弾と水素爆弾と細菌爆弾とによつて盛大に行つてい
る筈である。

『伊藤整作品集第五卷 伊藤整氏の生活と意見』(河出書房、一九五三・一)

その頃、というのはチャタレイ裁判の最高裁判決が確定すると予想していた一九五四か一九五五年のことを指す（実際には一九五二年一二月に伊藤整をも有罪として罰金刑を言い渡した東京高裁判決から五年後、一九五七年三月に最高裁が伊藤らの上告を棄却した）。『伊藤整氏の生活と意見』にはそれゆえ、軍拡を競う世界に対してのみならず、裁判所や検察、検閲に対する強烈な皮肉を読み取ることができる。この時に用いた語を流用しているが、その内容は大きく変わってそれ自体には皮肉な意味は込められていない。しかし、同時代の文脈において強烈な意味を喚起する語を再び用いたとき、読者の心理に引き起こされる不穏さを予想しないことはなかったろう。あえて問題的な語を駆使することによって伊藤は読者を挑発し、言表を強く印象付けようと考えたのではないか。

三、理論との相関

前節でとりあげた『花ひらく』はいわゆる大衆小説といえる内容だが、「あとがき」では創作活動の舞台裏を明かすスタイルがとられ、新聞小説を書く技術的心得などを解説している。そして論は小説で描くべきものは何かという問題に及び、志賀直哉や堀辰雄の発言を引いてリズムや反復が小説の根幹をなしてい

ることを確認し、「作家の任務」を主張する。

初刊では、次のようになっている。

その時代の調和感とそれに反抗して不協和音又は破調として現はれて来る新しいモチーフの感受様式を作り出すことが作家の任務である。(二二五二頁)

この記述が、訂正本を経て一九五四年の再刊本で次のように改められた。

その時代の調和感と、その調和感覚からはみ出した所に生命を見出したものの反抗感から起る不協和音又は破調なる新らしいモチーフを綜合した新らしい調和の模索様式を出すことが作家の任務である。(二二七頁)

その時代における秩序から逸脱する「モチーフ」を捉えるための様式を作り出すことがはじめ必要とされてきたが、改訂によって逸脱するところに「生命」の証があると解し、そこに生じる「反抗感」を基盤とした「モチーフ」を組み合わせた様式を求めるといように発想が深化している。「反抗感」は耳慣れない言葉とはいえ、この議論は『小説の方法』（河出書房、一九四八・一二）や『小説の認識』（河出書房、

一九五五・七)で追究される生命と抵抗の問題と密接にかかわるものである。「抵抗感」という言葉は『小説の方法』の段階からたびたび用いられている。『花ひらく』改訂版とほぼ同時期に刊行された『文学入門』(光文社、一九五四・一〇)には小説の描くべきものについて次のように記述されている^五。

小説は、このように^六、直接には芸としての約束の上に成り立つて、生命というものを、それがある枠にはめられること(社会的ありかた)や、失われることに抵抗する(死と生の自覚)形で描きだすものである。

それを抑圧するものに対して抵抗するという形において「生命」を描きだすことを小説の役割とみなす発想がここに示されている。その表象の手法として、モチーフの反復と交錯が用いられるという。

『小説の認識』では

生命がある機構の中にあつて、喜び、安全感、噴出口、逃避所を覚り、また苦しみ、歎き、叫ぶことで、それ自体を意識する欲望を満たすとき、それはその機構と類似した機構を、物語り、絵の構図、音の組織法などにおいて作り、そこに生命を放出してその抵抗感による生命を定着させる

ことが「藝を作る」という発想を述べている。

新聞小説の「あとがき」でも、伊藤は現実世界の秩序に抵抗する生命を描きだすことへのこだわりを、明確に提示しようとしていたのである。

注

- 一 『『得能五郎の生活と意見』における「余談」的方法の水脈』（『昭和文学研究』七一号、二〇一五・九）。
- 二 「『得能五郎』と検閲」（『文学』四卷五号、岩波書店、二〇〇三・九）。
- 三 因みに浅草と新宿に「場末的」という修飾を加えるのは講談社版からである。
- 四 婦人団体連合会や総評の主催により一九五三年一月二日港区公会堂で開かれた日本婦人大会を指す。
- 五 カップブックスという位置づけ、「入門」であることを意識してか、現代仮名遣いを用いている。
- 六 モチーフを反復して複雑なテーマを交錯させることを指す。